
流れる水は、止まることを知らず～現在編～

瀧音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れる水は、止まることを知らず〜現在編〜

【Nコード】

N8533L

【作者名】

瀧音

【あらすじ】

大都市ティンベル。

とある英雄が残るこの都市に、一人の青年と一匹の竜が訪れる。

そして、英雄と青年は、出会った。

彼らがどのような道を行くかは、誰も知らない。

なぜならこの物語は、現在いまという物語なのだから・・・

さあ。流れる水は、どんな軌跡を描くか。

そこにいる理由その1

活気があふれるこの街を、私はもう何年見続けてきただろう。

常識ある人間に問えば、数年。

非常識な人間に問えば、十数年。

この街に住む人間に問えば、数百年、といったところか。

でも、どれもはずれ。

正解は、千と、二十五年。

ここの人間でも、驚く年数だ。

それだけの長さを、私は生きてきた。

昔は、その長さが年をほとんどそのまま表していることに絶望したものだ。

だって、常識があつたって、非常識だって、ここに住んでたって、その長さを生きている人はほとんどいなかったから。

「お婆さん」と呼ばれてもおかしくなかった。

ショックだった。

かと言って、「お嬢ちゃん」と呼ばれたり、「お姉さん」と呼ばれるのさえもなんとなく気持ち悪くなっていた。

ショックだった。

でも、そのダブルショックを受けてから数日後、悟った。
もう自分は、人間ではないのだと。

そう悟ったら、なんだかすっきりした。

逆に今まで人間に固執していた自分が馬鹿らしくなった。

そして、私の周りにいる数少ない千年以上生きる彼らも、きっと
そんな経験をしたのだと気づいた。

なんだか、面白かった。

私は、後どれくらい生きるのだろうか？

100年？1000年？もしかしたら、もう10000年？

その間に、この街はまた姿を変えるだろう。

実を言えば、私が覚えているこの街の面影は、何にもなかった。

私が今いる、この建物を除けば。

それほどまでに、10000年は長いのだ。

だから、もし私が10000年後に生きていたら、間違いなく、今
考えていることと全く同じことを考えるだろう。

この街も、すっかり変わっちゃったなあ、と。

この場所で、この位置に立って、思うのだ。

そして、そういえば前にもここで同じこと考えたな、と思い出す
のだ。

だけど、私が10000年後に、この街にいる保証はない。

むしろ、いる確率より、いない確率のほうが高い。

普通ならば。

私は、ここを動くことはない。

未来永劫、絶対ないと言える。

私は、この街で死ぬのだ。

だって、もし私がこの街から出て行ってしまったら。

誰があいつらに、「お帰りなさい」と言ってやるのか。

それは私たちの約束。

私たちの仲間が帰ってきたら、「お帰りなさい」と言っこと。
帰ってきた仲間は、「ただいま」と言っこと。

私たちが仲間であるための、ただ一つの約束。

私は、その約束を守る。必ず。何があっても。

そして、その約束を守ることこそ、私がこの街で生きていく理由だ。

ふと、気づくと、私の相棒が隣でぼうつとしていた。
同じことを考えていると、すぐに分かった。

そんな柄じゃないくせに。

私は自分でもわかるようないやらしい笑みを浮かべて、相棒をからかった。

案の定相棒は、顔を真っ赤に……。はしていないが、私の名前を叫び、拳を繰り出してきた。

私はその笑みのまま、拳をよけ、建物から飛び降りた。後ろから、相棒が追いかけてくるのは見ないでもわかる。

さて、今日は何で相棒をなだめようか。

そこにいる理由その2

「大都市」と聞けば、高層ビルが立ち並び、道路が立体的に入り乱れて、人が数え切れないほど歩き回っている・・・そんなイメージがあった。

でも、今僕がいるここは、名前に大都市と付いていてもそのイメージとはかけ離れたところだった。

確かに、人は多い。

今、窓から見ているだけでも一体何人いるのかは分からない。

でも、存在する建物は一部例外を除けば高くても四階建て。

車が走るような道路は存在せず、全てが歩道のようになっていた。

大都市ティンベル。

それが今僕がいる場所の名前だった。

僕がこの都市に入っただのはつい昨日のことである。

とある事情から、もともと住んでいた町から移り住んできた。

その事情のための書類が、僕の目の前の机の上にある。

書類の一番上には「軍隊学校入学試験登録用紙」と書かれ、そのあとは、このように続いていた。

名前（振り仮名は必ず振ること）・・・中村純也なかむらしゅんや

歳（100歳以下は必ず書くこと）・・・17歳

性別・・・男

種族・・・竜人

属性・・・アレス

出身地（地球出身者は地球と書くこと）・・・地球

現住所・・・軍隊学校学生寮3号館304号室

一年前では目を疑うような項目がたくさん入っていたが、もう驚くことはない。

覚悟を決めたからだ。

守るための力を持っている。守りたい人がいる。

それが、僕が契約して、ここに來た理由だ。

だから、迷わない。

「純也、そろそろ行く」

扉から聞こえた相棒の声に返事を返す。
忘れ物がないか確かめ、気持ちを引き締めた後、ドアノブを握っ

た
・
・
・
・

その少年は、究極の・・・

「お前つてさ・・・なんていうか・・・」

「言わないで・・・がんばって直そうとしてるから・・・」

大都市ティンベル。

高い建物がほとんどないこの都市に、例外がいくつかある。

その一つ、ティンベル宮殿。

その宮殿の前に、一人の人間と・・・一匹の竜がいた。

人間のほうは、まだ幼さが残る顔立ちをした少年だった。

黒髪に黒い瞳、身長は160センチ程。

とても身軽そうで、元気に走りまわる様子が目に浮かぶようだ。

もっとも、いま彼は壁に手をつけて頂垂れているが。

竜のほうは、地球で言う西洋の竜のようであった。

背中には大きな翼、手足には鋭い爪、少し長めの首に少し太い胴、尻のほうから出ている尻尾。

しかし、想像する竜とは異なり、身長は少年と同じくらいであり、さらに二足歩行をしている。

鱗の色は茶色く、耕された畑の土を彷彿させた。

現在その竜は腕組みをし、少年を哀れんだ目で見ている。

こんな状況になる少し前

彼らは、この都市にある軍隊学校の入学試験を受けようとしていた。

入学試験受験者用の寮から出発し、つい先ほど受験票受理会場である宮殿についたばかりである。

しかし、竜の方はそのまま入っていかうとするのに対して、少年の方は宮殿の入り口前でぴたり、と止まってしまった。

竜はそれに気づき、少年のほうに振り返って言った。

「どうした、純也。まさか受験票を忘れたとかじゃないかな？」

少年の名は、中村純也なかむらじゅんやといった。

「ケディ……いや、別に、なんでも……なくも……ないんだけど……」

竜の名は、ケディ・A・ドラゴンアレスといった。

ケディは、目を細めて純也のそばまで来た。

竜は人間ほど顔の筋肉が発達していないので、こころろ表情が変わることはない。

ただし、一般的には目に感情が表れやすいのだ。

「どうしたんだ、本当に。具合でも悪いのか？」

「いや、そうじゃ……なくて……」

再度聞いても曖昧な態度しか返さない純也に、ケディはだんだんイラついてきた。

「なんだ？」

「その……」

しかし、ここでケディは気づいた。

「……いや、ちょっと待て。まさか……そういうわけじゃないよな？」

「たぶん、ご想像の通り……です、はい……」

「……都市に入ってくるときは、普通だったろ！？なんで今ここで!？」

純也がそれを認めると、ケディは思わず大きな声を出してしまった。

往来している人と竜が不思議そうに一人と一匹を見る。

「あ、あの時は!……なんというか、普通の緊張だったって

い
う
か
・
・
・
」

「・・・はあ、分かった。とりあえずここにいっても何も進展しないから、中に入るぞ」

ケディが、この状況を打開するために提案する。

これ以上は注目を浴びたくはなかったのだが……

「…………ごめんやっぱ無理iiiiiiiiiii」

「ちょ！純也！．．．いい加減にしろ！！」

突然純也は走って逃げ出し、ケディは一瞬面食らったものの、目に怒りの色を宿して追いかけた。

背中に通行人と通行竜の視線を受けながら……

そして冒頭に戻る。

純也が逃げ出した理由は・・・

「でもやっぱり誰かと話すってすごい怖いし、初対面って人の第一印象なわけだから、どもって変な人に見られたら嫌だし、そもそも目を見て話すってすごい恥ずかしいし、もし今日会った人が次に会った時にどう思われるかって考えるとこれもすごい怖いし、話し始めれば大丈夫って自分に言い聞かせてもやっぱり足は動かないし、心臓バクバクするし」

「・・・・・・・・お前のそれ、病気だろ」

彼は究極の人見知りなのだ。

(やっぱり明日にしてい?)

(.....)

(ごめん行くから睨まないで.....)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8533/>

流れる水は、止まることを知らず～現在編～

2011年1月16日03時34分発行